

私のすすめる
一冊の本無藤 隆
お茶の水女子大学保育実践の研究に
応用したい方法論
『フィールドワーク』佐藤郁哉・著
定価1854円 新曜社

この本は私にとって知的な興奮に満ち、また研究への示唆に富んだものだった。保育実践の研究に関心のある人はぜひ読むべきだと思うのだが、さて、それをどのように伝えたらよいのか。

かなり以前、私たちは、保育実践の観察を元にした考察をまとめたことがある(無藤隆・内田伸子・斎藤こずゑ編「子ども時代を豊かに」学文社、1986年)。そこでは、発達研究や保育研究に、教育人類学的なエスノグラフィ的方法を持ち込むことを提案をして、ささやかな試みを行った。今、佐藤さんのこの本を読んで、いかに私たちがエスノグラフィやフィールドワークの意味についてわかっていなかったかということと同時に、そこでの研究の過程での多くの苦労が必要なものであって、もっと徹底して苦勞すべきだったとも思う。

佐藤さんは、「暴走族のエスノグラフィ」(新曜社)で有名となった社会学者である。そこでは、ある暴走族のグループに長期にわたり密着して調査して、その実体を解明し、さらに高度な社会理論に発展させたのである。そして、ここに紹介している本は、そこで使用されている「エスノグラフィ(民族誌)」あるいは「フィールドワーク」という方法論を

解説している。この方法は、要するに、現地に行き、長い時間そこで生活することを通して、現地の人の考え方や暮らし方、また社会のあり方を解明する人類学的方法である。「その出来事が起こるまさにその現場に身をおき、そこに住む人々と出来事の体験を共有し、現場に流れる時間のリズムやテンポに身を添わせることを通して、調査地の社会と文化をまるごと理解し、またそこに住む人々を理解しようとする」のである。そして、佐藤さんの研究にあるように、近年、現代都市社会の諸集団にも、また学校などの組織の研究にも応用されている。

このような方法を、保育実践の研究に応用できてよいはずだ。アンケートや実験・テストではなく(それらを否定するわけではなく、組み合わせることが大事だと佐藤さんも指摘している)、まさに保育現場での保育者また子どものあるあり方、またそれを囲む環境や文化、さらに制度などを、保育にかかわり参与することを通して、感じとり、また「厚く」(詳しく)記述していく。そして、その記述の中から、理論化を試みるのである。保育実践の研究に関心のある研究者、また現場での保育者(もまた研究者だと私は考える)の必読の書として、おすすめする。